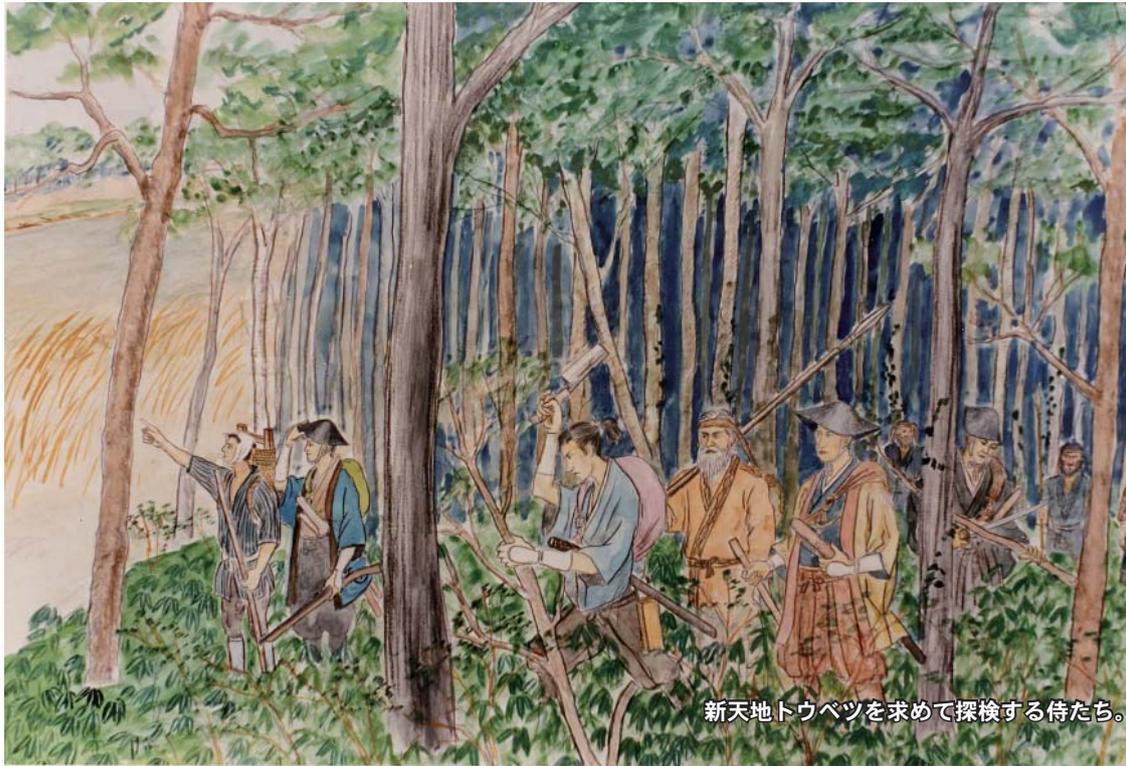


よみがえ

蘇る

Tobetsu History

当別 140 年の鼓動



新天地トウベツを求めて探検する侍たち。

ひしめきむらがる樹木。 天をかぎる巨木。

一四〇年前、この地はうっそうたる森林であった。

車も鉄道も道路もない時代、この人跡未踏の地を訪れ、電気もストーブもウールのセーターもない極寒の地に永住する決意とはどんなものであつたらう。

そこにすぎるしかない極限の状況の中にあつてなお、先人たちは大きな希望を持っていたに違いない。

明治政府の喫緊の課題であつた北海道の開拓は、明治維新という時代のうねりを受けた多くの人々によつて、なされてきた。

その中でも伊達邦直公主従による開拓は、その団結力で他とは趣を異にしていた。

私たちは過去から学びこれからを考えることができる。このまちは、どのように生まれ、どこに向かつていくのかも。

蘇る

開拓から 30 年（明治初期）



当時の開拓の様子
小野寺栄氏の版画
「開拓者」より

■時は明治 4 年 5 月

明治 4 年、伊達邦直以下 43 戸、161 人が祖先墳墓の地を去り、未知のシップ（現石狩市）に渡り開墾にいそみましたが、シップは作物の実らない痩せ地でした。移住者たちは、石狩の奥地にトウベツという肥沃の土地があると聞き、代替地を願い出て実地調査を行い、ようやくトウベツの開拓が許されました。時に明治 4 年 5 月 28 日、私たち当別の誕生でした。

トウベツは、原始未開の北海道の中でも有数の密林地帯であったため、開墾を進めるにはまず、道路の開削が急がれました。トウベツへ通じる小道が開通したのは明治 4 年 8 月 1 日のことで、石狩物揚場（旧八幡町郵便局付近）から当別神社のオンコの根元までの 5 里 7 町（約 21km）を、第一回移住者たちの総力を挙げて工事を成し遂げました。

移住者たちを最も苦しめたのは、密林巨木の伐採以上に交通の不便さでした。わずかにあった一本の小道は急坂、湿地の連続で人馬の往復さえまならぬ状態でした。また当別川は石狩川に通じているとはいえ、いたるところに流木が横たわり、船の往来を妨げていました。厳冬積雪の季節には山道からの交通が遮断され食料が運べなくなるため、屈強な男たちを選び、当別川の流木を切り除き小舟が通れるようにしました。

また、冬の間の食料を運び各戸に配ったため、移住者たちはみな安心して長い冬を迎えることができました。そして春が来て、大地を耕し種をまくと良く実り、人々はみなこの地を愛するようになりました。

■立ちはだかる巨木

当時の開拓は、うっそうとした密林地帯を伐採し、空き地となったところに少しでも日光が当たるように切り開くことから始まりました。しかし、巨木の切り株は畑の耕作を妨げました。直径 60cm 以上 1.5m にも達する木が、10 アール当り 50 本以上あったといわれ、これらの伐採と農地の耕作には約 50 人の労力を必要としました。

そこで木のまわりに枯れ木を積み、焼いて倒す方法が採られました。2 日間焼くことでほとんどの木は倒れましたが、その根を掘り起こすことは難しく火薬を使って爆破したといえます。

開拓元年から明治中期までの農業は、自給が目的でした。少しずつ増やしていく畑で麦類、豆類、あわ、いなぎび、ひえなどを作り、日々の食料としました。

生計を目的とした大麻の栽培は明治 7 年から始まっています。



■開拓模範村に選ばれる

明治14年(1881)、当別村は紋別村(現在の伊達市)とともに北海道の開拓模範村に選ばれました。ともに仙台藩の支藩であった岩出山と亶理藩の旧武士団が、刀や槍を斧や鍬に替えて切り開いた村でした。いずれも封建的な主従関係を縦軸に団結して事業を進めたこと、また旧来の農業技術にとらわれず海外の最新農業技術や西洋農機具をいち早く取り入れた成果でした。

また、この頃から伊達氏以外にも全国から開拓団が入植し、当別の開拓は一気に進んでいきます。

■村の機能の充実

開拓が進むにつれて、道路網も徐々に整備され、明治13年の対雁道路、21年の月形道路の開設と、従来の石狩道路の3つの幹線ができたことで人、物の流通が進みました。さらに学校・戸長役場・郵便局・警察分署・病院が相次いで設置、村の機能は飛躍的に向上します。明治23年(1890)には戸数230戸、人口1,100人、畑550haになりました。

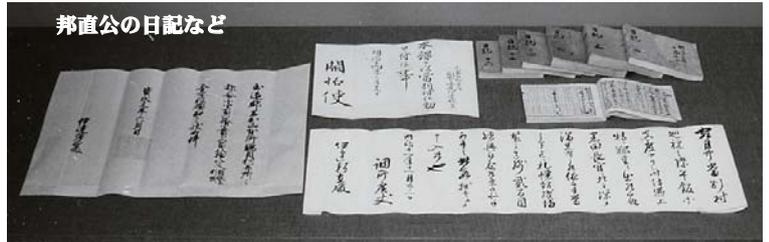
明治30年、国有未開地への入植を促す殖民区画地が、一定期間中に開墾を進めれば無償で払い下げられることとなり、移住者が他府県から相次いで入植しました。

六軒町に製線工場(帝国製麻当別製線工場)ができたのは明治27年でした。職工百数十名を擁し、操業後すぐにまわりに商店や劇場、巡査駐在所も設けられました。しかし、昭和2年の火災で大部分を焼失、廃止されています。

当時の日常生活用具

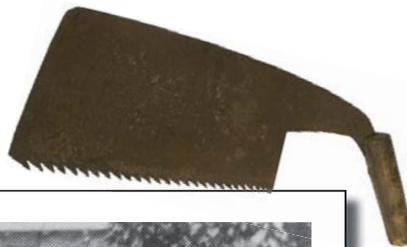


邦直公の日記など



伊達主従以外の主な集団移住

入植地	時期	出身	戸数など
弁華別地区	明治16	福岡県	柴藤善三郎ほか50戸
材木沢地区	明治22	徳島県	藤原儀三郎ほか10数戸
美登江・当別太地区	明治25	大分県 徳島県	赤木一、近藤新吉ほか
獅子内 二番川	明治28		平安農場、京佐賀農場 岡田農場、広田農場など



中小屋地区に入植した人々



明治20年代と思われる写真から当時の服装などが伺えます。中央の老人は刀をさしています。樺戸監獄(現在の月形刑務所)の囚人労働で開通した月形道路のまわりに殖民区画地が設定(明治27年)され移住民も増加して部落が形成されてきました。現在の中小屋温泉もこの頃、深谷慶吉により開設されています。

当別町 140 年特別企画

本町市街地の今昔物語



■地図から読む市街地の発達

下の地図は本間末五郎氏（町内幸町出身で教師となり、道立高校の校長を勤めた後、平成 15 年逝去）が当時を知る人の協力を得て平成 14 年に作成したもので、昭和 10 年当時の中心市街の様子です。国鉄（当時）の札沼線開通の翌年に当たるこの年、現在の当別

停車場線の道路わきには建物がほとんど描かれていません。現在の石狩当別駅は市街地の北のはずれで、さらにその北側には開拓当初からの共同墓地（現在の総合体育館付近）があり、南の当別川まで市街地の大きさは南北 500 m 位であったと想像できます。

当別町史（昭和 47 年編纂）によると、明治初期の伊達主従による

開拓はパンケチュウベシナイ川を挟んで東に東小川通、大川上通、西は西小川通、（現在の本通）伊達橋から下流を下川通りとして宅地の区画割を行いました。ここ伊達橋付近を中心として商店街が形成されていきます。この地図では建物に番号が付されており 159 もの商店等があったことを伺わせています。

明治 36 年頃の郵便局付近



昭和 10 年頃の市街地中心部付近



白壁が美しい中央の建物は石本商店（呉服太物雑貨屋）、手前が湯山商店（呉服太物商）、また左側に見える建物は村立病院（現富士屋旅館）で明治 38 年から村医制度となった。奥には明治 26 年に架けられた釣り橋が見え、現在の幸橋より上流にあったことが分る。中央に電柱も写っているが、明治 30 年 10 月開始の郵便局の電報（モールス信号）用のものと考えられる。日傘を差した婦人の姿も見え当時の様子をよく表す 1 枚。

■生活の様子は

159 もの商店のうち、現在では珍しい馬宿、馬具、蹄鉄屋といった馬に関係した業種が 5 件、産婆、髪結がそれぞれ 2 件、割烹、料亭も 7 件あり当時の時代背景を想像することができます。

現在の札幌信用金庫の位置には大正初年まで当盛館という劇場が

あり、その後、現在の河村工業の駐車場に移転し、活動写真、浪曲などの芸能を上演する寿座となった。このように当時石狩管内でも有数の規模を誇ったこの町には近隣からも多くの人を訪れ、生活した様子が伝わります。

井戸のマークも 2 つ記載されています。泥炭層が多く飲料に不適の場所が多い中、現在の幸橋の

北側と本通橋の北側で、どちらもおいしい水を汲むことができ、炊事の時間帯には桶を持った列ができたといいます。その後、戦後の市街地の人口急増で昭和 28 年には給水計画 2000 人規模の簡易水道施設が現在の弥生さくら館付近に設置されました。



本通りの伊達橋付近から北側を望むと現在の商店街の原型ができています。



昭和30年頃の本通商店街

インタビュー

配野博さん（白樺町在住・元石狩北部地区消防事務組合 消防長）

この地図の作成者、本間さんの同期生で地図の修正にも携わった配野博さんに当時は聞きました。

昭和30年頃、寿座では映画や芝居をやっていましたが、公演前に旗を振って街中で宣伝して歩くんですよ。栈敷席があって立派な建物でした。飲み屋も多くて町内で遊ぶことがほとんどでしたね。だから人出は多かった。



参考文献

- 当別町史（1972年）
- 新とうべつ物語「写真でつづる120年」（1991年）

本町の開拓の節目を迎える今年、広報では特集を組んで、過去の歴史や市街地、地域の今昔、人々の生活などをお伝えします。

次号では明治末から昭和初期を予定しています。

また、太美地区や青山など地域別に情報を集めています。

当別町の歴史に関する古い写真やエピソードをお持ちの方は是非ご連絡下さい。

■情報課広報広聴係

☎ 23 - 3069



農業従事者が駅に到着した写真。農業に多くの人手が必要だった当時、労働者を受け入れる協議会も設置され（昭和29年）道南や東北各県から常用、短期雇用の労働者を集めていた。田西待合所の看板が見える。

